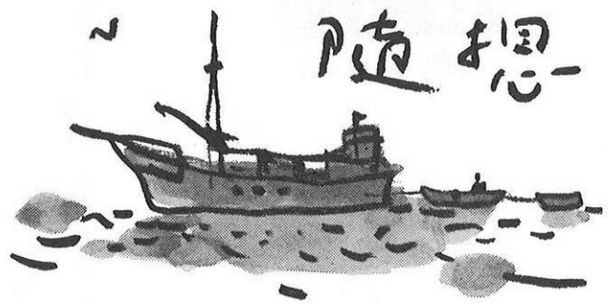

青葉の頃

新川智恵子

青葉の美しい頃になりました。南国のせいか若葉から青葉になるのがぐんぐんと目に見えて力強く思われます。庭一ぱいの楓の木は芽立の紅いのや萠黄色のやさまざまですが一週間くらいまで出揃わなかった時芽がもう前庭を覆ってしまって隣との目かくしになりました。日ごと訪れた鶯ももう深山の奥深く後退して時折、はるかに老鶯となってしまいました。水浴びをしたつくばいも周囲をかこんで雪の下の白い花が咲いています。掃いても掃いても常槃木落葉がうず高く、その中に点点と椿の赤い花が落ちています。もう春も逝くのですね。今年の春は雨が多くて桜もあっけなく散ってしまいました。私は昔からお花見が嫌いで、花時になると何となくざわめいた空気が花曇りの下によどんでいるような気がしていました。今でも家にいて遠くの花を眺めたり、散ってくるお隣りの花を掃いたりするのが好きです。昼さがりの独り居に庭の蕗をたいたお茶受けでお茶を飲んでぼんやりしているのも齢のせいでしょうか。春落葉の中をかさこそと雀が餌を拾っています。

著莪咲いて次々咲いて暮の春

青葉の頃になると苺が出廻ってきます。毎日デザートに苺を食べるのが楽しみです。一粉一粉念入りにへたをはづすのも食べる時の楽しさを思うからです。苺を食べる時いつも私には忘れられない遠い思い出があります。お友達や親戚知人との別れの宴も昨日にすんで明日は結婚式をひかえた夕べ、重いベタベタの髪を解いて洗ったままの心地よい夕食後、母と弟と三人ですぐ近くの苺園に苺を摘みに行きました。戦前の熊中の裏に苺園があって籠に一ぱい摘んでいくらだったか忘れましたが、薫風に吹かれながら今日かぎり又母の膝下を離れる感傷に私の苺を摘む手もためらいがちでした。母は何も語りませんでしたがはしゃいでいるのは弟だけでした。家に帰って苺を洗いながら私はラジオで覚えた「嫁ぐ日近く」をハミングしていました。「嫁ぐ日近き夏衣、麻の葉の帯つつましく…」。今でも此の歌は好きです。苺の甘酢っぱく、紅い美しい実の一つ一つに母の愛情がこもっているような気がしました。長い私の洗い髪に五月の風はさわやかに吹き抜けてゆきました。三十年前の今頃のことです。思い出にだけ出てくる母の面影となってしまいました。

熊本は緑の美しいところです。城下町は何処もしっとりとしたただずまいが多いようです。みどりはきれいですけれど町がきたないと思います。春の遅い山蔭に遊びましたが日本海の水は何処も澄み切って美しく松襖という防風林が刈込まれて手入れがとどいていました。名所旧跡は紙屑も落ちてなくて新道湖畔の公園は朝早くから婦人の清掃係りが手入れをしておりました。駅駅には牡丹の木々がすくすくと育って花の頃はどんなに見事だろうと思われました。平良の港に上って長崎市内の道もきれいです。雲仙の道路も人通りのない山中でも紙屑が落ちていません。四国もそうです。公園は何処も入園料を取っていますが、それだけ手入れがとどいていて見て廻るのに気持がよくて入園料を出すだけの値うちはあると思いました。又監視も充分です。熊本の公園のように入園料は取らないのに這入る人は無料の上に紙屑は散らす、樹木や花にはいたづらをするのでは持主はたまったものではないでしょう。ものにはけじめがあってしかるべきでしょう。もっと公徳心を養って「花盗人は盗人のうちに入らない」なんて平安時代のようなことをいってはいられないと思います。

もっと熊本のみどりを大切に、熊本の自然を大切にしたいと思います。

（俳人）

天草「天門橋」撮影記

大重春二

「天草五橋」が開通して間もないある日の午後、わたしは五橋の写真を写す用事で天草にいった。

カメラ一つをさげ、熊本市辛島町からでる九州産業交通の三角ゆき快速バスに乗った。バスは熊本市から、小さなイタリヤ国の形をして宇土半島を南下して、三角港にゆく。バスが熊本市内をぬけて宇土市にかかると、早くも右手の方向に島原港につづく海がひらける。バスはそれからさき、ずっと三角まで湾の海岸を走ることになる。赤瀬の浜では勤勉な女たちが、胸掛けのついたゴム長をはき、男のようにノリヒビの竹を海に運んでいた。別府、阿蘇、熊本、島原、雲仙、長崎と連絡する、この新しい観光ルートの海岸べりには、ビロー樹の苗木が植えてある。羽をひろげたようなこの亜熱帯樹の葉が、車が通過してゆくたびにキリキリ、風にあおられて空中に躍りあがる情景が、旅の目をたのしませた。やがてフロント・ガラスの前方海上に、陶磁器のごとく淡青に光る天草の島々が浮ぶ。島影は次第に大きくなる。しまいに手前の島の森の姿が鮮明にみえるところまでくると、バスはすでに三角町の入口にはいっていた。三角町の入口の道幅はせまい。そのせまい道に立ちならんだ家々の上に、こつ然と天門橋が現われた。天門橋は天草五橋の第一号橋で、三角の本土から大矢野島という天草の一の島にかけられたものである。その天門橋はかなりの高さで車中から仰がれた。

十六時近く三角港に着いた。海上から橋を写す計画のわたしは、船をさがして波止場にでた。波止場の入口にザボン売りの老婆がいた。老婆に船のことをきいてみた。老婆は〈船はなかですばい〉と、素っ気なかった。しかし三角から天草にゆく船ならまだあった。それを教えてくれたのは、老婆のところを去りかけたわたしを、背後から呼びとめた壮年の男であった。男は浅黒い扁平顔で、鳥打帽子をかぶっていた。とにかく三角港から船に乗ろう。今夜、熊本に帰れねば島に一泊するだけのことである。写真をうつすのもそれからだ。船に乗った。天草下島の本渡ゆきであった。男も乗った。船が動きだすと、甲板のおなじベンチにかけたわたしに、男が〈五橋の写真をうつすのだったら、この船が天門橋のところだけ通過する。そのとき写したらどうか〉と言った。わたしは五つの橋のうち、どれか一つ写せばよかった。男はバッグの中から四合ビンをとりだして呑みはじめた。わたしにも呑めとコップを渡した。酒は好きである。わたしは彼の好意に報いるために彼の写真をとることにした。甲板の手すりを背にして彼は何回か帽子をかぶりなおしたりしてポーズを作った。ところが二枚目を写そうとしたとき、下の船室から牛のような女が上ってきた。女は男の耳に何かを笑いながら話していたが、そのまま男とならんでしまった。女は天草の行商人であった。わたしは二人をならべて二枚目のシャッターをきった。〈奥さんにおこられらすばい〉。女が男をからかった。〈それはお前のことじゃん〉。男がにらみつけた。男は女にも酒を差した。女はコップを受取って、モンペのポケットからピーナッツの袋をとりだした。〈あんたサカナばな〉。男は△△セメント三角工場の工員で、先刻まで三角港外の島で砕石作業をやっていたのだった。ダンボール箱に蛤を詰めていた。明日は日曜の休みなので、妻子が待つ上島の大浦へ一週間ぶりに帰ってゆくところであった。蛤はその土産だ。大浦へはあと一時間かかる。船は三角の沖を大きくう回した形で進んでゆく。陽の光はようやく弱くなりかけ、汚れた海鳥が二羽おなじところをぐるりぐるりとゆっくり舞っていた。女は男と同じ部落だと語った。わたしはそれで彼らの親しさ加減が判り、また彼らの解放的な言動の上に天草民衆の実に牧歌的な生き方の一面を垣間みた気がして微笑された。

天門橋が現われた！

わたしは秋の残光の中に高く、真珠色に光り澄む橋に対して、シャターをつづけさまにきった。最後には後部甲板に立ちはだかり、刻々、山かげにかくれ遠ざかる橋の姿を捉えられる限り写した。

その夜、わたしは柳の旅館に一泊した。柳は大矢野島西南端の漁村である。翌日は第二号橋大矢野橋を写し寛永十四年に大矢野島にけつ起したキリシタン一揆勢の民衆が本渡富岡城へ攻め下った方角とは逆の東へ上って三角にでた。

（「詩と真実」同人）

花・初夏

つつましく古りたる壺やリラ咲きぬ　秋桜子
リラ咲いて静かに雨後の霧ながる　ちづ女
十薬（どくだみ）を抜きすてし香につきあたる　汀女
なつかしきあやめの水の行方かな　虚子
おのづから水の流れや花あやめ　立子
鈴蘭の野の霧ふかくゆきまどふ　何鳴
ひくき橋ひくき水面に杜枯（かきつばた）　黄枝

（「新編歳時記」より）